

出エジプト記 16 章 1-30 節
「信仰者の安息は幼子の安息」

はじめての方もいらっしゃると思います。土浦めぐみ教会の伝道師として新たに就任した公文光と申します。去年までは、町田南キリスト教会で伝道師として働いていました。まだ教師としての働きは2年目で、駆け出しですが、どうぞ、よろしくお願い致します。

私のめぐみ教会での働きは少し特殊なものになります。普段は別の二つの仕事をしています。新日本聖書刊行会では聖書翻訳の働きをしています。皆様のお手元にある新改訳の働きです。もう一つの仕事は東京キリスト教大学での非常勤講師としての働きです。そのような事情もあり、いつも教会にいるわけではありませんが、できる範囲で、精一杯頑張っ参ります。

さて、私のことはこれくらいにして、本日の聖書箇所に移りたいと思います。本日はマナの箇所から、安息は何かについて学んで参りたいと思います。この箇所からたましいの安息を得るのは如何に難しいことなのかを学べればと思います。さっそく、読んで参りましょう。

1-3 節

イスラエルの全会衆はエリムから旅立ち、エジプトの地を出て、第二の月の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野に入った。² そのとき、イスラエルの全会衆は、この荒野でモーセとアロンに向かって不平を言った。³ イスラエルの子らは彼らに言った。「エジプトの地で、肉鍋のそばに座り、パンを満ち足りるまで食べていたときに、われわれは主の手にかかって死んでいたらよかったのだ。事実、あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出し、この集団全体を飢え死にさせようとしている。」

直前にある出エジプト記 14 章から 15 章には、追いかけてきたエジプト軍に対する勝利についての記録があります。その勝利を目撃したイスラエルには信仰が芽生えました。「イスラエルは、主がエジプトに行われた、この大いなる御力を見た。それで民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。」と書いてある通りです。しかし 16 章を読みますと、その信仰はあっという間に消えてしまい、民は神とモーセに対して反抗するようになっていたことが分かります。

その反抗の性格について少し解説いたします。まず、民の認識はどのようなものであったのかを考えて参ります。彼らは主に対して反抗していたという認識はあったのでしょうか。そのことを考えるに当たり、より根本的なことを先に考えなければなりません。

3 節において、民は「われわれは主の手にかかって死んでいたらよかったのだ」と言いますが、ここで言われる民の「主」とは誰でしょうか。3 節の続きを読みますと、「事実、あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出し、この集団全体を飢え死にさせようとしている」と民は言っていますが、民は「主」と「あなたがた」であるモーセとアロンを区別していたことが分かります。民はモーセとアロンは「主」とは別の意思を持って行動していたと主張

しているのです。しかし、本物の神はモーセとアロンと共に民を導いていた神であります。

すると尚更、民が言う「主」の正体というのが問題となります。結論を申し上げますと、この民が言う「主」は民が心の中で作った偶像だったと思われるのです。民はモーセとアロンには反抗しているという意識があったとしても、「神には背いていない」という意識が同時にあったのでしょうか。

民はすでに心に偶像を作り、自分たちをエジプトから導き出した神が誰なのか分からなくなってしまっています。これは深刻な問題です。しかし、これが罪人の心の現実であり、だからこそ神は十戒において偶像礼拝を禁じているのです。

さらに悪いのは、民の思う「主」は彼らを救うことができない神であったという点です。民の発言は信じられないことのように思えます。しかし、これは現代においても日常的に起きていることだと思われるのです。現代の教会においても、同じような発言が聞こえてくるように思えるのは私だけでしょうか。

民の主張をもう少し見てみましょう。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ということばの通り、民はエジプトの生活を振り返って、それがよかったかのように錯覚しています。肉鍋のそばに座り、パンを満ち足りていたと言うのです。神を嫌うあまり、彼らにはそのような思いまであったようです。

民の主張についてもう一点だけ考えておきたいと思います。民のモーセとアロンが「この集団全体を飢え死にさせようとしている」という主張は本当だったのでしょうか。エジプトを出てもう 1 ヶ月以上経っていましたので、確かに、食べ物が心配になってきた頃でしょう。しかし、民はエジプトを出るときに家畜を連れ出しましたし、民が約束の地に到着する頃も民はまだ家畜を持っていました。つまり、彼らにはまだ家畜がいて、それを食べるほど飢えていたわけではありません。神はそこまではしていませんでした。

民の「飢え死に」ということばは言い過ぎでした。しかし、危機が迫っていたことは確かでした。危機的な時にこそ人の本心が出てくるものですが、民の場合には、信仰がないということが明らかになりました。私たちも民と同様、試練に合うことがあります。必ず人生には危機的な時がやってきますが、そういう時に私たちの本心が出るのです。

神は民の侮辱的な態度に対し、忍耐を持って接します。

4-5 節

主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたがたのために天からパンを降らせる。民は外に出て行って、毎日、その日の分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである。⁵ 六日目に彼らが持ち帰って調えるものは、日ごとに集める分の二倍である。」

神は民を罰するのではなく、民の挑発的な態度に応じて、マナを通して民を教えようとしてきました。

このマナのみおしえは、民を試みるためであったということは注目に値します。すでに民は試みにあっていましたが、民は不平を言い、その結果として民は罪の状態に陥っているということはすでに明らかになっていました。

ではこの試みは何を試していたのでしょうか。4節には「彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである」と書いてある通りであります。罪に陥っているということを前提に、今度はしるしを見て神のおしえ、それも罪の状態から抜け出すためのみおしえに聞くかどうかという点を神は試していました。

その試みは日ごとにその日の分だけのためにパンを集めることができるか、そして六日目に二倍を集めることができるかという点にかかっていた。

それにしても、安息日は罪人に与えられたという点は興味深いものです。罪人を試みるための日なのです。つまり、全き者であれば、安息日規定は必要ないということです。

さて、民はこれから試みられることとなりましたが、そのような神の意図はモーセしか知りませんでした。4節において語りかけられたのはモーセだけです。民には、また別のことをモーセは伝えます。

6-7 節

6 それでモーセとアロンは、すべてのイスラエルの子らに言った。「あなたがたは、夕方には、エジプトの地からあなたがたを導き出したのが主であったことを知り、⁷ 朝には主の栄光を見る。主に対するあなたがたの不平を主が聞かれたからだ。私たちが何だというので、私たちに不平を言うのか。」

ここでモーセとアロンは民の不平に対して答えます。民はエジプトから彼らを導き出したのはモーセとアロンであり、主ではないと主張しましたが、モーセとアロンは、民をエジプトから導き出したのは主であったという点を主張します。

民が不平を語っていた相手は、モーセとアロンでしたが、内容的にはその不平は、背景で働いていた主に対してのものでした。ですので、7節において「主に対するあなたがたの不平を主が聞かれた」と二人は言います。主は民の不平を聞かれており、それに答え、これから栄光を見せようとしていました。モーセはさらに念を押して語ります。

8 節

モーセはまた言った。「主は夕方にはあなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださる。それはあなたがたが主に対してこぼした不平を、主が聞かれたからだ。いったい私たちが何だというのか。あなたがたの不平は、この私たちに対してではなく、

主に対してなのだ。」

モーセは、民の不平は主に対してのものだったことをもう一度ここで強調しています。なぜここまでこのことを強調したのでしょうか。それは、罪に陥っていた民が、神が誰なのかということさえ分からなくなっていて、神に反抗していたということさえ、よく分かっていなかったからです。

これは私たちにも起こり得ることです。自分に都合の良い優しい神を創り、その神を「イエス様」と呼んでしまい、本物のイエス・キリストを敵だと勘違いしてしまうことは大いに有り得ることです。モーセはそのような民の心に危機感を感じていたようです。民は無意識に、神に敵対していたからです。神に対する無意識的な攻撃であっても、神は民のその不平をすべてご自分への挑発だと受け止めていました。その結果、民は非常に危険なところに置かれていました。

9-12 節

9 モーセはアロンに言った。「イスラエルの全会衆に言いなさい。『主の前に近づきなさい。主があなたがたの不平を聞かれたから』と。」¹⁰ アロンがイスラエルの全会衆に告げたとき、彼らが荒野の方を振り向くと、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。¹¹ 主はモーセに告げられた。¹² 「わたしはイスラエルの子らの不平を聞いた。彼らに告げよ。『あなたがたは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンで満ち足りる。こうしてあなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であることを知る。』」

民は自分たちが飢え死にするといい不平を言いましたが、神は民の必要をすでにご存知でありました。

この箇所を理解するために大切なのは 12 節の最後に登場する「こうしてあなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であることを知る」ということばであります。これはどのような意味なのでしょう。

それは、「主」はモーセを通して語っている神に他ならないということでした。さらにその神は「あなたがたの神」、つまり民の神であるということでした。民の神でありますので、当然、彼らのことを知っていて、養う神でした。

では、食べてパンで満ち足りた結果が「わたしがあなたがたの神、主であることを知る」ことに繋がるというのはどういう意味なのでしょう。ここで重要なのは「知る」ということばの意味です。「知る」というのは概念として神を知ることではなく、体験的に神を知ることです。よく食べ、腹が満たされた時に分かることがあると言うのです。民は、体験的に、その必要を満たしてくださる神を知る必要があったのです。

13-15

¹³ すると、その夕方、うずらが飛んで来て宿営をおおった。また、朝になると、宿営の周

り一面に露が降りました。 ¹⁴ その一面の露が消えると、見よ、荒野の面には薄く細かいもの、地に降りた霜のような細かいものがあった。 ¹⁵ イスラエルの子らはこれを見て、「これは何だろう」と言い合った。それが何なのかを知らなかったからであった。モーセは彼らに言った。「これは主があなたがたに食物として下さったパンだ。

このパンのことは 31 節において「イスラエルの家は、それをマナと名づけた」と記録されています。この名前の背景には 15 節があります。新改訳では「これは何だろう」と訳されていますが、これはヘブル語で「マン・フー」です。その前半の「マン」から「マナ」という名前は由来しています。「これは何だ」と名付けるほど、パンが不思議で得体の知れないものだったということが印象的だったのでしょう。

このマナは神のことばの結実そのものであり、その性質も神のことば通りでありました。この点について詳しくは 16 節以降に触れられています。

16-18 節

¹⁶ 主が命じられたことはこうだ。『自分の食べる分に応じて、一人当たり一オメルずつ、それを集めよ。自分の天幕にいる人数に応じて、それを取れ。』 ¹⁷ そこで、イスラエルの子らはそのとおりにした。ある者はたくさん、ある者は少しだけ集めた。 ¹⁸ 彼らが、何オメルあるかそれを量ってみると、たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった。自分が食べる分に応じて集めたのである。

一人には一人分だけという原則がここで語られています。その日の分だけ取ればよかったのは、明日のものは明日与えられるからです。

この原則は人間の罪的な性質に逆行するものです。墮落後に人間は、無意味な人生の果てに死ぬことが定められました。人間の働きは、死ぬという事実を否定するかのよう存在します。死ぬという現実を見ようとせず、日々の糧を得て、一日でも長く生きようとするのです。まさしくのろわれた人生です。

しかし、ここでは別の道が提示されています。神のことばの結実であるマナを食べることにより、神に生かされる生き方です。実に分かりやすい形で、神のことばが人に霊的ないのちを与えるとということが表されています。しかし、ここで神はその教訓を直接的には民に語りません。民には自分たちで考えて、それを理解することが求められています。

もう一点、ここで語られている奇跡の別の側面についても解説いたします。民は出ていくと、それぞれ違う量のマナを集めたようです。しかし、集めた量を量ってみると、18 節に書いてある通り、「たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった」のであります。

マナは人を満たすためのものでありましたので、どれだけ集めようが、みことば通りにちょうど必要な分が備わるようになっていたのであります。神の言った通りになるという意味

でもマナは神のことばの結実でした。神が人をパンで満たすと言ったら、必ず満たすのです。

それにしても、人の働きには何の意味があるのでしょうか。というのは、民が汗を流してたくさん集めても意味はなかったのです。逆に少なく集めた人であっても、同じように満たされたのです。努力は報われません。その結果として、頑張る気がなくなってしまうのではないのでしょうか。しかし、やる気がなくなることこそ神の意図ではないのでしょうか。やる気が削がれて、自分のこれまでの行いに意味があったのかということ振り返ることがみこころなのではないのでしょうか。

19-21 節

19 モーセは彼らに言った。「だれも、それを朝まで残しておいてはならない。」²⁰ しかし、彼らはモーセの言うことを聞かず、ある者は朝までその一部を残しておいた。すると、それに虫がわき、臭くなった。モーセは彼らに向かって怒った。²¹ 彼らは朝ごとに、各自が食べる分量を集め、日が高くなると、それは溶けた。

マナは神のみことばの結実であったと先ほど申し上げましたが、そのことはここでも確認できます。マナはその日のための食物であったため、次の日には必ずなくなってしまったのです。すべてはみことば通りになりました。

しかし、民の一部でそれを次の日のために残しておく者がいました。それは、明日はマナが与えられないかもしれないと考えたからだと思われます。先ほど読みました1節から3節において、民は神を忘れて、食べ物がないから死んでしまうと心配して不平を言いました。その時に民が感じていた罪的な不安は、奇跡を見た後も健在だったようです。明日、マナが降ってこなかったら死んでしまうと心配して残しておいたのです。

このようにマナを次の日のために残しておいた人たちは何も考えない、論外の人たちです。彼らは神のおしえを考えることもせず、罪的な生き方に帰って行ったからです。モーセはそのような人たちに怒ったようですが、神も怒っていたでしょう。

しかし、それは一部の民だけでした。ほかの民は残さなかったようです。しかし、他の民も決して、褒められた人たちではありません。彼らは奇跡を見たから残さなかったというだけであって、元々は不平を言っていた人たちです。

22-26 節

22 六日目に、彼らは二倍のパンを、一人当たり二オメルずつを集めた。会衆の上に立つ者たちがみなモーセのところに来て、告げると、²³ モーセは彼らに言った。「主の語られたことはこうだ。『明日は全き休みの日、主の聖なる安息である。焼きたいものは焼き、煮たいものは煮よ。残ったものはすべて取っておき、朝まで保存せよ。』」²⁴ モーセの命じたとおりに、彼らはそれを朝まで取っておいた。しかし、それは臭くもならず、そこにうじ虫もわかenかった。²⁵ モーセは言った。「今日は、それを食べなさい。今日は主の安息だから。今日は、それを野で見つけることはできない。²⁶ 六日の間、それを集めなさい。しかし七

日目の安息には、それはそこにはない。」

六日目にはさらなる不思議が起こり、七日目のためのマナは六日目に与えられました。安息日という概念についてはよくご存知だと思いますので、その点の解説は省き、「聖」の概念について解説いたします。

23 節には「明日は全き休みの日、主の聖なる安息である」ということばがありますが、この「聖」とはどういう意味でしょうか。教会ではよく聞くことばではあるものの、その意味は蔑ろ（ないがしろ）にされる傾向があります。「特別」という意味で読んでいる人が多いのではないのでしょうか。

「聖」とはまず、神の持つ性質のことを言います。神のあり方、とくにその愛に見られるあり方が聖なのであります。それは墮落した人間のあり方と区別して「聖」であるのです。

この箇所においては「七日目」が「聖」であると語られています。それは、単に七日目が特別だということではありません。それを特別に扱うということは前提としてあるでしょうが、より大切なのは、七日目を過ごす人間が聖でなくてはならないということです。民は神のような性質を持って七日目を過ごさなければなりません。

それは具体的にどのようなことでしょうか。23 節において、「全き休み」と「安息」が「聖」と関わっていることが示唆されています。神が創造の七日目に休んだように、民も休むことが求められました。ここが肝心な点ですが、七日目を安息の中で過ごせる人が聖なのであります。それだけで、限定的にではなく、完全に「聖」となったと言えるのであります。

つまり、七日目に安息に入れる人は、神のように、隣人を自分自身のように愛せる人でもあり、すべての律法を全うする人なのです。本当の意味で休むという一つのことのできている人は、すべてのことのできているのであります。

27-30 節

27 七日目になって、民の中のある者たちが集めに出て行った。しかし、何も見つからなかった。 28 主はモーセに言われた。「あなたがたは、いつまでわたしの命令とおしえを拒み、守らないのか。 29 心せよ。主があなたがたに安息を与えたのだ。そのため、六日目には二日分のパンをあなたがたに与えている。七日目には、それぞれ自分のところにとどまれ。だれも自分のところから出てはならない。」 30 それで民は七日目に休んだ。

七日目になってみると、民の中にマナを集めに出かけるものがいました。彼らが安息に入っていなかったのは、明白なことです。彼らはそれ以前に、28 節で神が語る通り、「命令とおしえを拒み、守らない」者たちだったのです。みおしえを受け取りもせず、それを拒んでいました。命令を受け取り、その上でそれを考え、理解するといった工程を経て、はじめて神の律法を守る者となれるのが、彼らは土台にさえ辿りつかずに終わっていました。

私たちもそのような人となってはなりません。すなわち、マナのおしえを聞いたにもかかわらず、帰宅したらすぐに忘れて普段の生活に戻る人になってはなりません。そのみおしえについてよく考え、反芻して、聖なる人になることが求められます。イエス・キリストがたとえで語られたあとに「耳のある者は聞きなさい」と言われましたが、このマナの奇跡についても同じ姿勢が求められます。

では、マナと安息日のみおしえは私たちに何を教えているのでしょうか。それは七日目を見ると非常に分かりやすいと思われます。

マナが与えられている間、民は六日間、ほとんど働く必要はありませんでした。食べ物は神により与えられ、民はそれを集めて調理するというだけの作業が求められました。それは労苦が伴う働きではありませんでした。

しかし、七日目はその簡単な作業さえなかったのです。六日目に二日分が与えられ、すでに調理が済んでいたため、何もしなくてよかったのです。神が全てをすでに与えたからです。

別の言い方をいたしますと、民が最も活動しない七日目にこそ、神は最も力強く働いたのです。つまり、人がそのわざをやめた時にこそ神はもっとも力強く働くという真実がここで、分かりやすい形で教えられているのです。

概念的に考えますと、非常に単純なことに思えますが、それができないのが人間なのであります。それは1節から3節に語られている、人間の性質のためです。民は食べ物がないと心配し、神を裏切ろうとしました。墮落後の人間は生きていくために、神に頼るのではなく、自分でなんとかしようとするのです。自己中心的な生き方が骨の髄まで染み付いていて、何かがあると自分のわざに頼るのです。どこかで神は頼れないと思っているからです。

しかし、信仰は「わざ」とは対照的で「何もしない」ことに特徴があることがここでは教えられています。単純なことですが、信じている人は神がすべてご存知であると確信しているのです。信仰の人は何があってもたましいが安息にあります。仕事をしていても心配事と言えるようなものはなく、たましいは安息の中にあるのです。

たとえば、景気が悪い時にリストラがあるという噂が流れた時、信仰がない人は慌てて、あれこれと策を講じて、悩まされるのです。しかし、信仰者はそんな危機的な時でも適切に必要な処置だけをして、その夜ぐっすり眠れるのです。安息にある人のために、神は特別に働くことを知っているからです。

また、信仰がある人は、日曜日にも安らかな心で礼拝を守ることができるのです。日曜日にもその心は聖だからです。しかし、信仰のない人は他の六日と同様、礼拝中も仕事のことをあれこれと考えるのです。日曜日さえも心を休める聖なる日になっていません。

では、信仰者の心はどのようになっているのでしょうか。信仰者は「明日も大丈夫だ、だから休める」と意識的に考えているのでしょうか。信仰者はそのようにはしないでしょう。むしろ、明日が大丈夫かどうかということは意識にさえないのではないのでしょうか。ただ父なる神がすべて供えてくださるという確信があり、もう考えることもとくにないような心の状態に信仰者はあるのではないのでしょうか。

つまり、信仰者の姿はちょうど幼子の安息の姿なのであります。今感じている必要についてはいろいろと泣き叫んでも、明日の事はまったく考えていないのです。親がいるということで十分であり、親がいるということだけが重要なのです。信仰者も同じです。父なる神がいるということだけで十分なのです。つまり、本日の説教題の通り、「信仰者の安息は幼子の安息」なのであります。

再度、別の言い方で同じことを申し上げますが、休むということが「わざ」となってはなりません。幼子は、自分は休んでいるとは思っていません。安らかな心は信仰の結果であり、それはわざではありません。私たちの日曜日は「わざ」としての休みになってはいないか、吟味する必要があります。

いかがでしょうか。私たちは安息に入れているのでしょうか。新約聖書は、しきりに安息に入るようと、教会に教えています。神の忍耐にも限界があり、私たちがいつまでも安息に入ることを拒むのであれば、「もうあの人たちは私の民ではない」と宣言されて、イスラエルの民が滅ぼされたように、私たちも滅ぼされるからです。

しかし、安息に入ると言うことは言うまでもなく、難しいことです。幼子のようになることが求められるからです。難しいゆえに、イスラエルの民は荒野で滅びました。

私たちは大丈夫でしょうか。私たちは安息日のおしえについて今まで考えることさえも拒んできたのであれば、それは、私たちは七日目にもマナを集めに出て行った民のような人たちであったということになります。

言うまでもなく、「自分のわざをやめる」、そして「心配するのをやめる」ことは難しいことです。墮落後の人間のあり方そのものが消失しなければならないからです。そんなことは可能なのでしょうか。しかしやめないのであれば、神の基準に達せなかったということになり、ゲヘナに投げ込まれてしまいます。

では、どのように「自分のわざ」をやめれば良いのでしょうか。考え得る方法は一つだけあります。それは、神の提示する基準の前で自信が完全に喪失し、自分に絶望して、何らかの自分のわざを行う気力が絶えるような状態になることです。そうすれば、自分から何もなくなるのです。その時、天から祝福が降ってくるようになります。自分のわざが止んだ(やんだ)時にこそ、神の救いのわざが力強く働くからであります。

そのためにはまず、律法に取り組む必要があります。

「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。」

神の命令を心に刻み、過ごして参りましょう。

祈り：天の父なる神様。

本日はあなたの求める安息はどのようなものであるかを学びました。あなたは私たちに忍耐強く愛を持って接して下さり、頑なな心を持つ私たちに正しい方向に導くみおしえを与えてくださっていることを感謝いたします。

マナのみおしえを私たちが反芻し、そこから学ぶことができますように助けてください。また、あなたのことを口先だけで「父」と呼ぶのではなく、心から「父」として慕い、あなたの安息に入れる者となれますよう、お導きください。

イエス・キリストの御名により、お祈りいたします。アーメン。